

曖昧さへの態度と心理的な問題解決の関連 ーレジリエンス及びコーピング方略に着目して

石井 宏祐

The Relationship between Tolerance of Ambiguity and Psychological Problem-Solving
: Focusing on Resilience and Coping Strategy

Kosuke ISHII

要旨：本研究の目的は、曖昧さへの態度が心理的危機の問題解決を下支えするレジリエンスと日常的ストレス状況における問題解決傾向を示すコーピング方略に対しどのように関わっているのかを探索的に検討することを通して、心理的問題解決の示唆を得ることである。そのため、大学生を対象に、曖昧さへの態度とレジリエンスとコーピング方略の度合いを問う無記名自記式質問紙調査を Web 上で実施した。2 大学 152 名の有効回答を得て統計的に分析した。その結果から、心理的問題解決場面に際しては、曖昧さに対して不快であれ好奇心であれ、モチベーションをもって積極的に変化に取り組むのであれば、むしろ問題の解決へのこだわりを手放せる可能性があることが示唆された。

キーワード：曖昧な状況 レジリエンス コーピング方略 心理的な問題解決

1 はじめに

曖昧さに対する態度の研究は、曖昧さ耐性の低さへの着目からであり、Frenkel-Brunswik (1949) が曖昧さ耐性の低さと人種的偏見の関連を指摘したり、Adorno, T.M.ら (1950) によって権威主義的人格の一部として概念化されたりすることから始まった。そしてその後長らく、曖昧さへの態度は「曖昧性耐性の低さという否定的態度を中心とした一次元的な観点から論じられて」(西村, 2007) いた。

しかし、WHO が 2021 年にグッドプラクティスと認めたオープンダイアログでも不確実性への耐性が重視されているように、曖昧さへの肯定的態度は我々の心理的な問題解決において、極めて重要な意味を持つと考えられる。すでに西村 (2007) は、曖昧さへの態度を、耐性という一次元でとらえることの限界を指摘しており、曖昧さに接したときにどのような評価や志向性が生じるかというさまざまな側面を包括する多次元な“態度”に着目し、曖昧さの享受、曖昧さへの不安、曖昧さの受容、曖昧さの統制、曖昧さの排除の 5 因子を見出

している。さらに曖昧さへの肯定的態度が、愛着スタイルの安定という適応指標と関連することを示唆している。

VUCA 時代といわれる今日、曖昧な状況でどのように多様な課題に取り組むかが問われている。曖昧さへの態度がどのように課題解決に役立つのかを整理することは重要である。特に大学生においては、これまでは新型コロナウイルス感染拡大の危機にさらされ社会生活や大学生活などで不確実で曖昧な状況におかれ、これからは VUCA 時代を牽引していくことが求められている。大学での学生相談支援の観点からも、曖昧さへの態度の検討は急がれるテーマである。

本研究では、曖昧さへの態度を西村（2007）の 5 因子をもとに類型化し、心理的問題解決との関連を検討する。例えば曖昧さの享受や排除が不安や受容と組み合わせることで心理的問題解決に及ぼす影響は異なると考えられるためである。そして心理的問題解決の指標としてレジリエンスとコーピング方略に着目する。レジリエンスは心理的危機における問題解決指標として、コーピング方略は日常のストレスにおける心理的問題解決指標として採用する。

レジリエンスは「回復力」や「心理的ホメオスタシス」と表現され、近年適応プロセスに関わる重要概念として着目されている。最も引用される定義は、Masten, A.S., Best, K.M. & Garmezy, N. (1990) によるものであり、「困難で、脅威的な状況にもかかわらず得られる望ましい結果やその結果が得られる過程、あるいはその過程を支える許容力や結果」とされている。強いストレス状態におかれた人々の中に、社会的不適応症状を起こす人や精神的健康を保つ人が混在することに着目した Rutter, M. (1985) が、心理的にもホメオスタシスのような機構を想定しうるとし、レジリエンスを概念化した。

コーピング方略はストレッサーに対する処理過程を指し、問題解決のために行う様々な方略である。尾関・原口・津田（1991）は、問題や状況を解決するコーピング（問題焦点型コーピング）と生じた問題そのものよりは自らの情動を調節するコーピング（情動焦点型コーピング）などのいわゆる積極的な方略、そして、問題から逃げたりあきらめたりするコーピング（回避・逃避型コーピング）のどちらかといえば消極的な方略に類型化できることを明らかにしている。

本研究は、心理的危機の問題解決を下支えするレジリエンスと日常的ストレス状況における問題解決傾向を示すコーピング方略に対し、曖昧さへの態度がどのように関わっているのかを探索的に検討することを通して心理的問題解決場面におけるセルフケア及び支援の方向性の示唆を得ることを目的とする。

II 方法

1. 調査対象

本研究では、大学生を対象に自記式質問紙調査を行った。152名から回答を得、有効回答率は100%であった。そのためその後の分析は152名を対象とした。調査にあたってフェイス項目として年齢と性別への回答を求めた。

大学生152名のプロフィールは、平均年齢20.08歳（標準偏差.79歳）で、性別は「女性」103名（67.76%）、「男性」46名（30.26%）、「回答しない」2名（1.32%）、「その他」1名（0.66%）であった。

2. 質問項目の作成手順

本調査はWebにて回答を収集した。Googleフォームを用いた。

質問紙はフェイス項目と3つの尺度から構成された。

フェイス項目では、年齢と性別（「女性」「男性」「回答しない」「その他」のいずれかを選択）について回答を求めた。

続いて、レジリエンス尺度への回答を求めた。

項目は齊藤・岡安（2010）による大学生用レジリエンス尺度の25項目を用いた。「コンピテンス」「ソーシャルサポート」「肯定的評価」「親和性」「重要な他者」の5因子で構成され、環境要因、個人内要因、獲得要因の3要因にまたがっているため、レジリエンスを包括的にとらえることができると考えられることから採用した。

しかし「全く当てはまらない（1点）」から「とても当てはまる（4点）」の4件法だったため、「どちらともいえない」といった回答も可能になるように、「まったくあてはまらない（1点）」「どちらかといえばあてはまらない（2点）」「どちらともいえない（3点）」「どちらかといえばあてはまる（4点）」「とてもあてはまる（5点）」の5件法に変更した。

次に、曖昧さへの態度尺度への回答を求めた。

項目は西村（2007）による曖昧さへの態度尺度の26項目を用いた。曖昧さへの態度を曖昧さ耐性の低さという否定的な側面のみからではなく、多側面から測定することを目的として作成された尺度である。曖昧さの「享受」、「不安」、「受容」、「統制」、「排除」の5因子で構成され、肯定的態度と否定的態度の両面を把握することができると考えられることから採用した。

しかし「まったくあてはまらない（1点）」から「非常にあてはまる（6点）」の6件法だったため、「まったくあてはまらない（1点）」「あまりあてはまらない（2点）」「どちらかというにあてはまらない（3点）」「どちらともいえない（4点）」「どちらかというにあてはまる（5点）」「かなりあてはまる（6点）」「とてもあてはまる（7点）」の7件法に変更した。

最後に、コーピング方略尺度への回答を求めた。

項目は尾関（1993）によるコーピング尺度の14項目を用いた。積極的なコーピングとされる「問題焦点型」と「情動焦点型」、消極的なコーピングとされる「回避・逃避型」の3因子で構成され、個人が経験しているもっとも重要なストレスに対するコーピングを簡便に測定することができると考えられることから採用した。

しかし、「全くしない（0点）」から「いつもする（3点）」の4件法だったため、「まったくあてはまらない（1点）」「どちらかというにあてはまらない（2点）」「どちらともいえない（3点）」「どちらかというにあてはまる（4点）」「とてもあてはまる（5点）」の5件法に変更した。

なお、コーピング尺度は最近の出来事について回答を求めた。そのため教示文には「できるだけ最近の、あなたがストレスを感じてストレス解消を試みた時を思い出してください」を加えた。

3. 調査期間と調査手続き

調査は令和5年6月に行った。

調査手続きは、九州圏内の国立大学1校と私立大学1校それぞれ1つの講義において、講義終了後に受講生に向けて調査協力を依頼し、Web調査フォームへのリンクをQRコードにて提示し、任意で調査協力を得た。

所要時間は概ね10分強であった。

4. 分析方法

調査協力者それぞれの回答をもとに、3尺度について因子分析を行い、下位尺度得点の平均値と標準偏差を算出した（11変数）。次に、曖昧さへの態度5変数の観点から階層的クラスタ分析を用いて類型化し、3クラスタ解を採用した。最後に、曖昧さへの態度3類型を独立変数とし、レジリエンスの5変数及びコーピング方略1変数を従属変数とした分散分析を行った。

5. 倫理的配慮

口頭での依頼の際とWeb調査のフェイス部分で、協力は任意であること、調査は無記名で行うこと、回答は個人を特定できないこと、得られたデータは研究目的のみに使用することを説明し、同意する場合のみ回答するよう依頼した。

III 結果

1. 因子分析

調査協力者それぞれの回答をもとに、レジリエンス尺度と曖昧さへの態度尺度とコピーング尺度について因子分析を行い、下位尺度得点の平均値と標準偏差を算出した。

(1) レジリエンス尺度

レジリエンス尺度 25 項目に対し、ガットマン基準と対角 SMC 基準から 5 因子構造を仮定し、最尤法プロマックス回転による因子分析を行った。その過程で 2 つ以上の因子に対して高い因子付加量.35 以上を示した項目と、いずれの因子にも低い因子負荷量.35 未満を示した項目を除外した。5 因子からなるプロマックス回転後の最終的な因子パターンと各因子の α 係数および因子間相関を表 1 に示す。

第 1 因子は、「何か困ったことがあったら相談できる人、あるいは場所がある。」「辛い時には、誰かに話を聞いてもらうことが多い。」「普段から、私の気持ちをよく分かってくれる人がいる。」「愚痴を言い合える人がいる。」「私に元気がない時は、気付いて励ましてくれる人がいる。」の 5 項目からなる。周囲からの支援とその資源を表す項目に因子負荷量が高いことから「ソーシャルサポート」因子と命名した。

第 2 因子は、「今までの人生で、私にとって重要な人と出会ったと思う。」「私の人生に良い影響を与えてくれた人がいる。」「大切だと思える人がいる。」「私には、自分の目標を達成する力があると思う。」の 4 項目からなる。重要な他者の存在を表す項目に因子負荷量が高いことから「重要な他者」因子と命名した。

第 3 因子は、「人と話すことは苦にならない。」「いろいろなことを周りの人と話すことが好きだ。」「友達が多い方だ。」の 3 項目からなる。他者や状況などに対して肯定的に接することができる特性を表す項目に因子負荷量が高いことから、「親和性」因子と命名した。

第 4 因子は、「努力すれば、どんなことでも自分の力でできると思う。」「どんなに困難な場面であっても、私は諦めない。」「努力すれば立派な人間になれると思う。」「何があっても自分のベストを尽くす。」の 4 項目からなる。効果的な変化をもたらすことができるという自己評価を表す項目に因子負荷量が高いことから「コンピテンス」因子と命名した。

第 5 因子は、「何事にも悪いことばかりではないと楽観的に考える。」「どうにもならないことに関しては、あれこれと考え込まない。」「いやなことがあっても笑い飛ばせる。」「いつも物事の明るい面を見ようとする。」「結果がどうなるのかハッキリしない時は、いつも 1 番良い面を考える。」の 5 項目からなる。楽観的肯定的な側面を重視する傾向を表す項目に因子負荷量が高いことから「肯定的評価」因子と命名した。

なお、 α 係数はいずれの因子も.75を超え、十分な、あるいは許容できる範囲の信頼性を示した。

表1 レジリエンス尺度の因子分析結果

	I	II	III	IV	V	共通性
ソーシャルサポート ($\alpha=.87$)						
何か困ったことがあったら相談できる人、あるいは場所がある。	.77	.11	.00	.01	.05	.72
辛い時には、誰かに話を聞いてもらうことが多い。	.77	-.13	.11	-.01	-.05	.55
普段から、私の気持ちをよく分かってくれる人がいる。	.74	.02	.02	.03	.06	.61
愚痴を言い合える人がいる。	.70	.06	-.09	.04	.03	.52
私に元気がない時は、気付いて励ましてくれる人がいる。	.64	.06	.13	.04	-.01	.57
重要な他者 ($\alpha=.78$)						
今までの人生で、私にとって重要な人と出会ったと思う。	.02	.86	.08	-.09	-.01	.75
私の人生に良い影響を与えてくれた人がいる。	-.02	.74	.04	-.09	-.01	.50
大切だと思う人がいる。	.33	.59	-.14	-.06	-.16	.52
私には、自分の目標を達成する力があると思う。	-.09	.54	-.05	.29	.20	.55
親和性 ($\alpha=.80$)						
人と話すことは苦にならない。	.09	-.05	.80	.00	-.01	.67
いろいろなことを周りの人と話すことが好きだ。	.00	.01	.79	-.02	-.02	.61
友達が多い方だ。	.05	.08	.59	.04	.06	.49
コンピテンス ($\alpha=.75$)						
努力すれば、どんなことでも自分の力でできると思う。	.13	-.18	.04	.68	-.08	.42
どんなに困難な場面であっても、私は諦めない。	-.15	.01	.09	.67	.01	.45
努力すれば立派な人間になれると思う。	.16	-.13	-.11	.66	.04	.41
何があっても自分のベストを尽くす。	-.03	.24	.00	.64	-.07	.57
肯定的評価 ($\alpha=.83$)						
何事にも悪いことばかりではないと楽観的に考える。	.09	-.03	-.13	-.01	.87	.72
どうにもならないことに関しては、あれこれと考え込まない。	-.03	-.07	-.12	-.03	.86	.66
いやなことがあっても笑いとばせる。	.17	-.05	.09	-.08	.69	.56
いつも物事の明るい面を見ようとする。	-.08	.08	.18	.04	.60	.49
結果がどうなるのかハッキリしない時は、いつも1番良い面を考える。	-.15	.06	.20	.02	.42	.27
	因子相関					
	I	-.51	.42	.38	.22	
	II		-.44	.52	.18	
	III			-.41	.35	
	IV				-.29	
	V					-.27

(2) 曖昧さへの態度尺度

曖昧さへの態度尺度 26 項目に対し、MAP 基準から 5 因子構造を仮定し、最尤法プロマックス回転による因子分析を行った。5 因子からなるプロマックス回転後の因子パターンと各因子の α 係数および因子間相関を表 2 に示す。

第 1 因子は、「見たことがないものには想像力をかきたてられる。」「いくつかの解釈ができると、いろんな角度からものごとを見れる点では自由な感じがする。」「不完全なことは完全にしていってプロセスがあってもおもしろい。」「いくつかの解釈ができると、視野や可能性が

広がっていくのでおもしろい。」「いろんな可能性がある、すべてを試してみたい。」
「見たことがないものは見ておくにこしたことはない、ぜひ見てみたい。」「いろんな可能性がある」と選べるのでうれしい。」の7項目からなる。曖昧さに魅力を感じ積極的に関与していく傾向を表す項目に因子負荷量が高いことから「曖昧さの享受」因子と命名した。

第2因子は、「はっきりしない状況ではどうしたらいいかわからなくなる。」「情報が多すぎると、かえって頭が混乱してしまう。」「はっきりしない状況におかれると不安になる。」
「いろんな可能性がある、選ぶのに時間がかかって迷う。」「見たことがないものに出会うと怖くなる。」「見たことがないものにすぐに近寄るのは抵抗がある。」の6項目からなる。曖昧さへの不安が喚起される情緒的傾向とそれにとまなう対応の難しさを表す項目に因子負荷量が高いことから「曖昧さへの不安」因子と命名した。

第3因子は、「確実でないところは確認して明らかにしたい。」「いろんな可能性がある時には、さまざまなことを考慮して対処法を考えておきたい。」「情報がたりないと正確な判断はできない。」「情報がたりないと動きづらいので、できるだけ情報を集めたい。」「一貫していないことには信頼がおけない。」の5項目からなる。曖昧さを否定的にとらえ、コントロールしようとする認知的傾向を表す項目に因子負荷量が高いことから「曖昧さの統制」因子と命名した。

第4因子は、「不完全なままにしておいた方がよい時もある。」「はっきり決めないままにしておいた方が気が楽なこともある。」「不完全なことがあるからおもしろい。」「はっきりしていないことがあっても、そのままにしておくのがいい。」「不完全なところも、ある程度受け入れられる。」の5項目からなる。曖昧さをそのまま受け止める傾向を表す項目に因子負荷量が高いことから「曖昧さの受容」因子と命名した。

第5因子は、「どっちつかずな立場はどちらか一方にはっきりさせるべきだ。」「どっちつかずであることはよくないと思う。」「はっきりしないことはできるだけ白黒つけたい。」の3項目からなる。曖昧さを認めない拒絶的な傾向を表す項目に因子負荷量が高いことから「曖昧さの排除」因子と命名した。

なお、 α 係数はいずれの因子も.80を超え、十分な信頼性を示した。

表 2 曖昧さへの態度尺度の因子分析結果

	I	II	III	IV	V	共通性
曖昧さの享受 ($\alpha=.85$)						
見たことがないものには想像力をかき立てられる。	.78	.07	-.12	-.02	.11	.52
いくつかの解釈ができると、いろんな角度からものごとを見れる点では自由な感じがする。	.76	.10	.05	.02	-.06	.59
不完全なことは完全にしていくプロセスがあっておもしろい。	.71	-.10	.02	-.11	.18	.50
いくつかの解釈ができると、視野や可能性が広がっていくのでおもしろい。	.68	.07	.04	.13	.03	.50
いろんな可能性があるのと、すべてを試してみたくなる。	.62	-.10	.04	.04	.03	.44
見たことがないものは見ておくにこしたことはないで、ぜひ見てみたい。	.58	.05	.06	.11	-.04	.41
いろんな可能性があるのと選べるのでうれしい。	.53	-.09	.03	-.09	-.15	.36
曖昧さへの不安 ($\alpha=.85$)						
はっきりしない状況ではどうしたらいいかわからなくなる。	.11	.81	-.10	-.09	.07	.60
情報が多すぎると、かえって頭が混乱してしまう。	.06	.79	-.11	.00	-.06	.57
はっきりしない状況におかれると不安になる。	-.13	.74	.16	-.04	.01	.70
いろんな可能性があるのと、選ぶのに時間がかかって迷う。	.21	.71	-.06	.04	-.13	.47
見たことがないものに出会うと怖くなる。	-.19	.54	.00	.07	.07	.42
見たことがないものにすぐに近寄るのは抵抗がある。	-.20	.52	.18	.05	.07	.46
曖昧さの統制 ($\alpha=.83$)						
確実でないところは確認して明らかにしたい。	.02	.03	.84	-.06	-.03	.72
いろんな可能性がある時には、さまざまなことを考慮して対処法を考えておきたい。	.05	-.07	.79	-.10	-.20	.61
情報がたりないと正確な判断はできない。	.03	.13	.66	.06	.06	.52
情報がたりないと動きづらいため、できるだけ情報を集めたい。	-.05	-.11	.66	.13	.07	.42
一貫していないことには信頼がおけない。	.03	-.03	.56	.03	.11	.35
曖昧さの受容 ($\alpha=.80$)						
不完全なままにしておいた方がよい時もある。	-.09	-.05	-.01	.92	.13	.76
はっきり決めないままにしておいた方が気が楽なこともある。	-.08	.04	.02	.79	-.03	.61
不完全なことがあるからおもしろい。	.22	-.01	.08	.55	-.02	.41
はっきりしていないことがあっても、そのまましておくのがいい。	.07	.01	-.02	.47	-.10	.28
不完全なところも、ある程度受け入れられる。	.26	.00	-.03	.40	-.13	.34
曖昧さの排除 ($\alpha=.83$)						
どっちつかずな立場はどちらか一方にはっきりさせるべきだ。	.03	-.04	.02	.13	.97	.88
どっちつかずであることはよくないと思う。	.03	.04	-.08	-.10	.83	.70
はっきりしないことはできるだけ白黒つけたい。	.07	.01	.24	-.17	.53	.49
	因子間相関	I	II	III	IV	V
	I	-	-.27	.16	.27	-.25
	II		-	.20	.13	.20
	III			-	-.20	.32
	IV				-	-.22
	V					-

(3) コーピング尺度

コーピング尺度 14 項目に対し、MAP 基準から 2 因子構造を仮定し、最尤法プロマックス回転による因子分析を行った。その過程で 2 つ以上の因子に対して高い因子付加量.35 以上を示した項目と、いずれの因子にも低い因子付加量.35 未満を示した項目を除外した。プロマックス回転後の最終的な因子パターンと各因子の α 係数および因子間相関を表 3 に示す。

第 1 因子は、「時の過ぎるのにまかせる」「なるようになれと思う」「こんな事もあると思っ
てあきらめる」「大した問題ではないと考える」「何らかの対応ができるようになるのを待
つ」「物事の明るい面を見ようとする」の 6 項目からなる。無理に解決しようとする
諦観による問題への対処を表す項目に因子付加量が高いことから「諦観型コーピング」因子と命
名した。

第2因子は、「現在の状況を変えるよう努力する」「情報を集める」「自分のおかれた状況を人に聞いてもらう」「人に問題解決に協力してくれるよう頼む」「問題の原因を見つけようとする」の5項目からなる。解決に向けた積極的取り組みを表す項目に因子負荷量が高いことから「解決志向型コーピング」因子と命名した。

なお、 α 係数は第1因子「諦観型コーピング」で.73と許容できる信頼性を示したものの、第2因子「解決志向型コーピング」では.67と低かった。したがって、第2因子は変数として用いる妥当性に疑いがあるため、その後の分析には用いないことにした。

表3 コーピング尺度の因子分析結果

	I	II	共通性
諦観型コーピング ($\alpha=.73$)			
時の過ぎるのにまかせる	.72	-.04	.51
なるようになれと思う	.64	-.01	.41
こんな事もあると思ってあきらめる	.54	-.08	.27
大した問題ではないと考える	.53	-.04	.27
何らかの対応ができるようになるのを待つ	.51	.03	.27
物事の明るい面を見ようとする	.43	.30	.34
解決志向型コーピング ($\alpha=.67$)			
現在の状況を変えるよう努力する	-.07	.67	.43
情報を集める	-.11	.60	.34
自分のおかれた状況を人に聞いてもらう	.09	.55	.34
人に問題解決に協力してくれるよう頼む	-.04	.50	.24
問題の原因を見つけようとする	.06	.41	.18
因子間相関			
	I	II	
	I	-.24	
	II	-	

2. 変数の要約

レジリエンス尺度の5つの下位尺度、曖昧さへの態度尺度の5つの下位尺度、コーピング方略尺度の1つの下位尺度、計11変数それぞれの記述統計量を表4に示す。

表4 各変数の記述統計量と信頼性係数

変数名	有効N	平均値	標準偏差	分散	最小値	最大値
ソーシャルサポート	152	3.87	.89	.79	1.20	5.00
重要な他者	152	4.17	.67	.45	1.25	5.00
親和性	152	3.19	1.00	1.00	1.00	5.00
コンピテンス	152	3.42	.79	.62	1.00	5.00
肯定的評価	152	3.02	.89	.80	1.40	5.00
曖昧さの享受	152	4.98	1.00	1.01	2.29	7.00
曖昧さへの不安	152	5.08	1.13	1.27	1.67	7.00
曖昧さの統制	152	5.43	.97	.93	1.00	7.00
曖昧さの受容	152	4.72	1.18	1.38	1.40	7.00
曖昧さの排除	152	4.05	1.48	2.20	1.00	7.00
諦観型コーピング	152	3.69	.70	.49	1.50	5.00

3. クラスタ分析

(1) クラスタ分析による類型化

調査協力者の曖昧さへの態度を類型化するために、「享受」、「不安」、「統制」、「受容」、「排除」の5つの曖昧さへの態度得点を用いて、階層的クラスタ分析（Ward法）を行った。テンドログラムと解釈可能性から、3クラスタ解を採用した。第1クラスタには90名、第2クラスタには12名、第3クラスタには50名が分類された。

(2) 各クラスタの特徴の検討

次に、5つの曖昧さへの態度の程度に基づき各クラスタがどのように分類されているかを把握するために、得られた3つのクラスタを独立変数、「享受」、「不安」、「統制」、「受容」、「排除」の5つの曖昧さへの態度得点をそれぞれ従属変数とした一元配置の分散分析を行った。その結果、5つの態度すべての得点において、クラスタ間に有意な差が認められた（「享受」 $F(2,149)=15.98, p<.001$ 、「不安」 $F(2,149)=12.61, p<.001$ 、「統制」 $F(2,149)=8.86, p<.001$ 、「受容」 $F(2,149)=93.09, p<.001$ 、「排除」 $F(2,149)=55.17, p<.001$ ）。

さらに、どのクラスタ間に有意差があるのかを明らかにするために、Holm法による多重比較を行った。その結果、「享受」については、第1クラスタが第2クラスタに比べて0.1%水準で有意に低いこと、また第3クラスタに比べて0.1%水準で有意に低いことが認められた。「不安」については、第1クラスタが第2クラスタに比べて1%水準で有意に低いこと、また第1クラスタが第3クラスタに比べて1%水準で有意に高いこと、さらに第2クラスタが第3クラスタに比べて0.1%水準で有意に高いことが認められた。「統制」については、第1クラスタが第2クラスタに比べて0.1%水準で有意に低いこと、また第2クラスタが第3クラスタに比べて0.1%水準で有意に高いことが認められた。「受容」については、第1クラスタが第2クラスタに比べて0.1%水準で有意に低いこと、また第1クラスタが第3クラスタに比べて0.1%水準で有意に低いことが認められた。「排除」については、第1クラスタが第2クラスタに比べて0.1%水準で有意に低いこと、また第1クラスタが第3クラスタに比べて0.1%水準で有意に高いこと、さらに第2クラスタが第3クラスタに比べて0.1%水準で有意に高いことが認められた。

なお、分散分析及び多重比較の結果を表5に示す。

表5 クラスタによる曖昧さへの態度の一要因分散分析結果

曖昧さへの態度	第1クラスタ	第2クラスタ	第3クラスタ	F値	多重比較 (Holm法) <i>p</i> < .05のみ
	N=90	N=12	N=50		
	<i>M</i> (<i>SD</i>)				
曖昧さの享受	4.63 (.94)	5.61 (.75)	5.46 (.91)	15.98 ***	2≐3>1 (2>1***, 3>1***)
曖昧さへの不安	5.21 (1.04)	6.17 (.62)	4.59 (1.14)	12.61 ***	2>1>3 (2>1**, 1>3**, 2>3***)
曖昧さの統制	5.44 (.78)	6.40 (.84)	5.16 (1.15)	8.86 ***	2>1≐3 (2>1***, 2>3***)
曖昧さの受容	4.00 (.89)	5.98 (.64)	5.72 (.60)	93.09 ***	2≐3>1 (2>1***, 3>1***)
曖昧さの排除	4.42 (1.21)	6.25 (.81)	2.86 (1.05)	55.17 ***	2>1>3 (2>1***, 1>3***, 2>3***)

*** *p* < .001, ** *p* < .01, * *p* < .05, *n.s.* 非有意

(3) クラスタの命名

群間比較によって相対的に第1クラスタは、「享受」と「統制」と「受容」が低く「不安」と「排除」は中程度であった。しかし「享受」と「統制」と「受容」の低さは中点値を下回るものではないことに注意が必要である。第1クラスタの大学生は、曖昧さに不安を感じてそれを解消するために情報を集めたり曖昧な状況を明確にとらえようとしたりするものの、曖昧さの排除に突き動かされたり変化のきっかけとして活かしたりするというわけではないと考えられることから、第1クラスタを「曖昧さに伴う不安への対処」と命名した。

第2クラスタは、5つの曖昧さへの態度すべてが高く、特に「不安」と「統制」と「排除」が高かった。第2クラスタの大学生は、曖昧さの不快感やそれを低減することに意識が向きやすいと考えられることから、第2クラスタを「曖昧さの不快感を低減することへのこだわり」と命名した。

第3クラスタは、「享受」と「受容」が高く、「不安」と「統制」と「排除」が低かった。「不安」と「統制」の低さは中点値を下回るものではないことに注意が必要であるが、「排除」は中点値を下回っていた。第3クラスタの大学生は、曖昧さへの不安は感じるものの、同時に知的好奇心を刺激され、曖昧な状況の解消にとどまらない変化への積極性が賦活されやすいと考えられることから、第3クラスタを「曖昧さを契機とした変化への積極性」と命名した。

(4) 差の検定

曖昧さへの態度によってレジリエンスやコーピング方略に違いがみられるのかを明らかにするため、曖昧さへの態度による3類型を独立変数とし、レジリエンスに関する5つの下

位尺度得点とコーピング方略に関する 1 つの下位尺度得点それぞれを従属変数とした一元配置分散分析を行った。

その結果、レジリエンスについては、3群の間で重要な他者と肯定的評価に有意差がみられた。重要な他者 ($F(2,149)=4.34, p < .05$) について Holm 法による多重比較を行ったところ、「曖昧さに伴う不安への対処」が、「曖昧さの不快感を低減することへのこだわり」および「曖昧さを契機とした変化への積極性」よりも 5%水準で、有意に低かった。また、肯定的評価 ($F(2,149)=10.21, p < .001$) について Holm 法による多重比較を行ったところ、「曖昧さを契機とした変化への積極性」が、「曖昧さに伴う不安への対処」よりも 0.1%水準で、また「曖昧さの不快感を低減することへのこだわり」よりも 5%水準で、有意に高かった。一方、ソーシャルサポート ($F(2,149)=1.10, n.s.$) と親和性 ($F(2,149)=.46, n.s.$) とコンピテンス ($F(2,149)=1.43, n.s.$) には有意差はみられなかった。

コーピング方略については、3群の間で諦観型コーピング方略に有意差がみられたため ($F(2,149)=9.14, p < .001$)、Holm 法による多重比較を行ったところ、「曖昧さに伴う不安への対処」が、「曖昧さの不快感を低減することへのこだわり」よりも 5%水準で、また「曖昧さを契機とした変化への積極性」よりも 0.1%水準で、有意に低かった。

なお、分散分析及び多重比較の結果を表 6 に示す。

表 6 曖昧さへの態度によるレジリエンスとコーピング方略の分散分析結果

	曖昧さに伴う不安への対処 N=90	曖昧さの不快感を低減することへのこだわり N=12	曖昧さを契機とした変化への積極性 N=50	F値	多重比較 (Holm法) p < .05のみ
	M (SD)				
ソーシャルサポート	3.37 (.93)	3.90 (1.15)	4.02 (.73)	1.10	n.s.
レ ジ リ エ ン ス					
重要な他者	4.04 (.63)	4.50 (.58)	4.31 (.71)	4.34 *	2≐3>1 (2>1*, 3>1*)
親和性	3.14 (.99)	3.19 (.97)	3.29 (1.05)	.46	n.s.
コンピテンス	3.41 (.72)	3.77 (.73)	3.35 (.90)	1.43	n.s.
肯定的評価	2.79 (.76)	2.88 (.93)	3.46 (.96)	10.21 ***	3>2≐1 (3>1***, 3>2*)
諦観型コーピング	3.50 (.68)	4.03 (.49)	3.95 (.66)	9.14 ***	2≐3>1 (2>1*, 3>1***)

*** p < .001, ** p < .01, * p < .05, n.s. 非有意

IV 考察

本研究では、調査協力者である大学生の曖昧さへの態度を類型化するために、「享受」、「不安」、「統制」、「受容」、「排除」の5つの曖昧さへの態度得点を用いてクラスタ分析を行った。その結果、「曖昧さの不快感を低減することへのこだわり」と「曖昧さを契機とした変化への積極性」と「曖昧さに伴う不安への対処」に分類された。

続けて、曖昧さへの態度3類型を独立変数とし、レジリエンスの5変数及びコーピング方略1変数を従属変数とした分散分析を行った。

「曖昧さの不快感を低減することへのこだわり」は、5つの曖昧さへの態度がすべて高く、特に不安と統制と排除が高いことから、曖昧さの不快感に意識が向きやすくそれを低減させることに関心があり行動につなげようとする傾向が示唆された。レジリエンスに関しては肯定的評価が低いことから、問題が生じた際、楽観的肯定的な側面を重視することが少なく、一方で重要な他者の存在がレジリエンスとして働きやすいことも明らかになった。またコーピング方略に関しては諦観型コーピングが多く採用されることから、曖昧さに対し不快感を覚え、楽観的にもとらえにくいにも関わらず、実際の心理的問題解決場面では、柔軟に諦めることもできることが示唆された。

「曖昧さを契機とした変化への積極性」は、曖昧さの享受と受容が高く、曖昧さへの不安と曖昧さの統制と排除が低かった。特に排除が低いことから、曖昧さを契機として現状の変化に好奇心をいだきやすいことが示唆された。レジリエンスに関しては肯定的評価が高いことから、曖昧さへの不安を快ストレスとして受け止める余裕があることが示唆され、好奇心の背景として想定しうると考えられた。またコーピング方略に関しては「曖昧さの不快感を低減することへのこだわり」と同様に、諦観型コーピングが高かった。しかし異なるのは、問題が生じた際、楽観的肯定的な側面を重視できることである。積極的な諦観によって、問題の解決にこだわらず、よりよい変化へのモチベーションへと活かせることが示唆された。

「曖昧さに伴う不安への対処」は、曖昧さに不安を感じてそれを解消するために情報を集めたり曖昧な状況を明確にとらえようとしたりするものの、「曖昧さの不快感を低減することへのこだわり」のように曖昧さの排除に突き動かされたり、「曖昧さを契機とした変化への積極性」のように変化のきっかけとして活かしたりするほど、変化へのモチベーションが高いわけではないと考えられる。しかもレジリエンスに関しては肯定的評価が低いことから、問題が生じた際、楽観的肯定的な側面を重視することが少ない傾向がみられる。心理的問題が持続する状況に不安を覚えるにもかかわらず、受け入れられず、諦めることもできないため、問題がさらに持続してしまう悪循環に陥りやすいことが考えられる。

以上より、曖昧さに対し、不安感を積極的に低減しようとしたり積極的に変化の意欲を高めたりしてモチベーションとして活かすことができれば、心理的問題解決場面でむしろ諦観によって問題の解決にとらわれずに済むようになることが示唆されたといえよう。一方、曖昧さに対し不快を覚えるものの、その不安がモチベーションとして活かされない場合は、心理的問題解決場面で物事を肯定的にとらえることが難しく、さらに問題解決も困難になる可能性が考えられる。

V 結論

本研究では、曖昧さへの態度と心理的な問題解決の関連を検討するため、大学生を対象に、曖昧さへの態度とレジリエンスとコーピング方略の度合いを問う無記名自記式質問紙調査を Web 上で実施した。その結果、心理的問題解決場面に際しては、曖昧さに対して不快であれ好奇心であれ、モチベーションをもって積極的に変化に取り組むのであれば、むしろ問題の解決へのこだわりを手放せる可能性があることが示唆された。

謝辞

本研究の調査にご参加いただいた大学生の皆様並びに調査協力者募集にご協力いただいた大学の先生方に心より感謝申し上げます。また本稿を丁寧に査読してくださった先生、本論文集編集事務局の方々に、厚く御礼申し上げます。

文献

- Adorno, T.W., Frenkel-Brunswik, E., Levinson, D.J. & Sanford, R.N., *Authoritarian Personality*, New York, Harper & Row, 1950
- Frenkel-Brunswik, E., Intolerance of Ambiguity as an Emotional and Perceptual Personality Variables, *Journal of Personality*, 18: 108-143, 1949
- Masten, A.S., Best, K.M. & Garmezy, N., Resilience and development: Contributions from the study of children who overcome adversity maltreatment on social competence and behavior problems, *Developmental and Psychopathology*, 6: 121-143, 1990
- 西村佐彩子 (2007) 曖昧さへの態度の多次元構造の検討—曖昧性耐性との比較を通して、パーソナリティ研究, 15(2): 183-194
- 尾関友佳子・原口雅浩・津田彰 (1991) 大学生の生活ストレス、コーピング、パーソナリティとストレス反応, 健康心理学研究, 4: 1-9
- 尾関友佳子 (1993) 大学生用ストレス自己評価尺度の改訂：トランスアクションな分析に

向けて, 久留米大学大学院比較文化研究科年報, 1: 95-114

Rutter, M., Resilience in the Face of Adversity: Protective Factors and Resilience to Psychiatric Disorder, *British Journal of Psychiatry*, 147: 598-611, 1985

齊藤和貴・岡安孝弘 (2010) 大学生用レジリエンス尺度の作成, 明治大学心理社会学研究, 5: 22-32